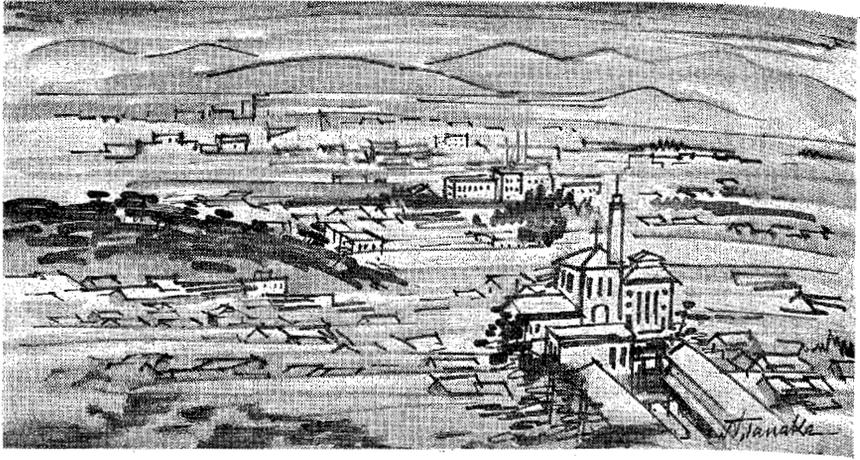


第三号



1971

京都大学人文科学研究所



人 文 第 三 号 1971年 1月—5月

も く じ

わたしの考え

としよりの冷水

島田 虔次

書 評

(4) (2)

平岡武夫・今井清校訂『白氏文集』(林屋辰三郎)・吉田光邦『京の手仕事』(林巳奈夫)・石毛直道『住居空間の人類学』(吉田光邦)・安部健夫『清代史の研究』(小野和子)

共同研究のうき

(9)

色の空の学び／「大正デモクラシー」という言葉／オトナの哲学／宇宙論的感情／「共同利用」としての研究會／ベイリ教授の来講／百花斉放・百家争鳴

研究ノート

(17)

日本におけるジャーディン・マセソン商會・山本 有造  
巡礼、旅に群れる 権山 紘一

講 演

(20)

十二支の起源(G・ファン・エスブロック)・遊びと聖なるもの(ロジエ・カイヨワ)

水野清一君を偲ぶ

(22)

旅だより

(24) (22)

テグの講演会……………梅棹 忠夫  
ハーバードだより……………山下 正男  
真夏のオーストラリア……………飯沼 二郎  
東洋学文献センターの任務と現状……………日比野丈夫

書いたもの一覽(一九七一年一月—五月)

(30) (20)

人のうき(9)・将来計画(10)編・編集後記(10)

カット・田中 重雄

## としよりの冷水

島田虔次

このあいだ、ある書類作成において、今日の中国研究の問題点といったふうなことをあげねばならぬ羽目になり、トッサの場合、つぎの二点を指摘しておいた。旧中国研究と現代中国研究とのますます進行する乖離、中国を直接には知らない中国研究者の増加。この両者は別に誰の指摘をまつまでもない、天下周知の事実である。しかし、それだけにやはり、たえず指摘しつづけなければならぬ。馴れっこになって何ら怪しもうとしない風が、ひろがりつつあるから。

中国古典の我が国におけるは、ギリシヤの古典のヨーロッパにおける如きものといわれる。しかし中国文明は、ギリシヤの場合の如く樞花一朝のみではなかった。現代ギリシヤのことは知らなくても、ギリシヤ古典研究の大家ではありうるであろう。しかし中国の場

合、その文明は高度の持続性を保っている。いわゆる「世界史の奇蹟」である（藪内清『中国の科学文明』）。中国古典の研究は、当の中国本土において今日まで二千年間、中断することなく続けられて来ている。

中国の風土と人民とを直接に体験しない学者の増加ということも、痛切な問題である。凡そ一つの国の社会、文明の研究が、その最も基礎的な条件として、先ずその国にゆき、その土地と人民とを体験することから出発すべきは、自明の理である。勿論、中国の土を踏まないでも偉大な学者があらわれ得ることは、徳川時代の例によっても知られる。しかしそれは古典の普遍性の問題をいま別とすれば、要するに、行けなかつたのである。今日において中国研究の学者が中国の土地をふみ、その人民に接しようという意志を持つとせ



ず、それどころか、そのことに何の痛痒をも感ずることがないとするならば、それは殆んど、病理現象というべきであろう。七、八年前、中国の学者を招聘しようという運動が起った時、誰であったか「どうせ、留学させろ、くらいのことだろう」と言った人があるそうであるが、私はそのとき、実に奇妙な気がしたので覚えている。なぜなら私は、まさにその通りに考えていたのであるから。私はじつさい不思議でならないのであるが、中国へ行きたい、現地を見てその実感によって検証して見なければはつきりしたことは何も言えないのだ、という自覚なしに、どうして中国史研究や現代中国研究の学者であり得るのか。わたくしには、不可解というほかない。

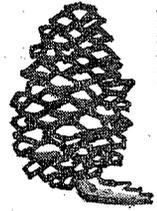
また、中国の学者をよび、その自国の歴史や文化に対する研究成果を聞くことが「われわれの学問にとって何のプラスにもならない」と公言した人もあった。「われわれの学問」という言葉に、ある特殊な意味がこめられていたことは、わからぬではない。しかし、ともかく、私はドキモを抜かれたのである。いわんや、中国の学問はおくれている、なんら学ぶべきものなし、とやうに至っては、ただ、ただ感嘆これを久しうする以外、手がなかった。

もちろん、中国の学問（中国研究）がすすんで進んでいるというのではない。公平に見て日本の方が「成果をあげている」部門は、いくらかもある。それは、学問の世界においては、当然ありうべきことである。しかしながら、その場合でも、中国のことは中国人が一番よく知っているのだという、いわば公理の上にしたってのことにすぎない。西欧人、アメリカ人の中にも、刀のツバの研究、近松や源氏物語では、我々が足もとへも寄れぬ学者がいる。しかし果して彼等の方がわれわれ以上に、日本を「知っている」であろうか。学問はたしかに体験そのままではなくて、抽象せられた別個の領域である。しかし、前提あるいは土台としての基礎的な体験との往復をたえず保たなければ、殆んど無意味な論理一貫性におちいつてしまうかもしれない。

どうせ限られたスペースである。起りうべき反論、反撥、それに対していま、予防線を張っておくつもりはない。私はただ一種の原則論を言ってみただけである。——わたくしも何時しか五十歳を越してしまった。年寄のひや水の気味がないではないかもしれない。



# 書評



平岡武夫・今井清校訂

『白氏文集

卷三、卷四、卷六、卷九  
卷十一、卷十七

(A5判、四〇四頁、京大人文科学研究所)

久しぶりで書架から平岡武夫先生の『経書の成立』を引き出してみた。奥付に昭和二十一年一月二十日発行とある。京の町かどでこの書物を購入し、むさぼり読んだときを想い起した。国敗れて山河ありといいますが、その国土すらも焦土と化したこの時期に、国敗れても学問ありといったよろこびをふかく感じた。とくに天下的世界観などに教えられるところが多かったが、この書物の後記に、

「この戦争によって日本は敗者の地位に立ったけれども、しかし民国が日本の接攘国であり、隣邦である事実、また日支の文化が過去に於て交流し、将来に於て

もまた交流し合ふに相違ない事実、これは些かも動きのない真実である。」

と書いていられる。当然と云えば当然だが、このような信念の上にこそ、今度の先生を班長とする共同研究『白氏文集』の校定」という至難の事業も、まさしく位置づけられるであろう。

『白氏文集』は、いうまでもなく唐の詩人白居易(七七二—八四六)の作品集で、われわれ日本文化を学び考えるものにとっても、王朝いらいの日本人の教養として忘れることのできないものだ。『枕草子』に「文は文集、文選」と書かれたように、文集(もんじゅう)とだけ読んで親しまれ、

詩文の典範とされてきた。それはすべて自撰により、もと七十五卷三千八百四十篇の多きに及び、いずれも長安の都の上下貴賤を通じて愛誦されたものばかりであった。入唐の学生・僧侶が、その優麗な作風に魅せられ、唐朝の流行をそのまま日本に移したのも自然であろう。

唐の会昌四年(八四四)に、入唐僧惠壽(えがく)も蘇州の南禅寺で『文集』を写して持ち帰った。なお白氏の存生中である。この僧は仏典よりもよほど詩文を愛していたのであろう。その写本は今日のこらないが、それを鎌倉時代に伝写し異本と校合した古鈔本が金沢文庫その他にのこされることになった。『文集』は、その写本の一部が敦煌までも伝わり、また部分的に抄出された鈔本も数多いが、ついに中国では南宋になり、紹興初年(元年—一一三一)刊の『白氏文集』七十一巻という改編された刊本(宋刊本)をみる以前の姿は、まったく断片的にしかとどめられていない。その点でも、日本に伝わる古鈔本は貴重であろう。そして宋刊本も、こんにちではまぼろしの本で、それをうけた明の刊本(馬本)によってうかがうはかばかしいとい

う。ところが、それとは別に日本では、元和四年（一六一八）に那波道内が印刷した本があつて（那波本）、その『文集』は、朝鮮に伝わつていた改編以前の本（銅活字本、麗本）の姿を伝えるものと考えられるというのである。

このようにして今回の校定と刊行は、木活字を思わせる古雅なおもむぎの那波本を、そのまま印影して底本とし、それに宋刊本・麗本さらに古鈔本など全伝本にわたる校定を朱筆で加えられたのである。まことに壮大な作業である。その巻数が前記の

## 吉田光邦 『京の手仕事』

著者から御献呈いただいたので、程なく読んでしまったが、最近になつてこれの書評をせよという。内輪のものだから、書評をするつもりでもう一度読みなおすにも及ぶまい、ということなので、工程を一つ省かせていただいた。

一口でいえば過去現在の京都の手工業を

六巻となつた事情は、まったく現存古鈔本との校合の便宜と作業の進行状況によるものようである。しかしそのうちには、新築府・長恨歌・琵琶行など、白居易の主要な作品が含まれており、門外漢の興味をそそるものがある。宋刊本以前の白居易の眞の心にふれようとする努力が、このようにして部分的にせよ達成されたことはまことに貴重である。ただ一寸欲張つた話ではあるが、校定の成果を一篇ごとに評価していただけたら、いっそう有難かつたと思う。

（林屋辰三郎）

（A5判、二二九頁、腰々装）

記した本である。過去については平安、江戸、明治の各時代を知るに丁度よい書物を、夫々二選び出し、その書物をして語らしめる。平安時代については『延喜式』の規定によつて当時の官営手工業を解説、江戸時代については貞享二年版の京都のガイドブック『京羽二重』によつて概況を紹

介、貞享元年の序のある地誌、『雍州府志』の土産に関する部分によつて京都のもろもろの業種の手仕事を記す。明治時代については明治十一年に作られた『内国勸業博覧会委員会報告』に記される京都の出品物に対する批評の語、明治三二年刊、黒田天外著『名家歴訪録』という画家、工芸家のインタビュー記録の引用によつて手仕事の浮沈、変遷の様がつづられている。現代については、もちろん、著者の実際の調査によつている。

このような仕組みで記されているのは単なる技術の歴史でもなく、経済史でも勿論ない。機械を用いずに実に様々なるものを生産した手仕事を「産業レベル」から見たものである。昔は服飾、家具、什器、文房具、乗物、武器など、生活のあらゆる部面にあつた品物がすべて手仕事によつて作られたのであるが、その各々の種類について、材料、加工法、人員の配分、生産のシステムなどにわたり、詳細に、具体的に解説されている。古今の技術に関して該博な知識をもつた著者にして始めて可能なことである。各産業のこうしした記述はそれ自体として頗る興味深い。つられて読んでゆく

と、しまいに至って現代というレベルからの、過去の歴史の変遷の見通しが自ら開けてくる、という仕掛になっている。最後の方には手仕事の分野に機械を導入するとういう事が起るか、その良さが再認識されながらも衰微してゆくものが多い京の手仕事は、どのようにして活路が得られるか、など将来の問題についても面白い例が引かれ、吉田氏の手仕事論が展開される。

文章も組みも大変よみ易い。また本文と

## 石毛直道 『住居空間の人類学』

(A5判、二八四頁、鹿島出版会)

茶室の設計の第一は、まず主人の動く線をきめることである。第二は客の動く線をきめることである。そして第三は水屋の位置をきめることである。これは京都の数寄屋大工の最長老、北村伝兵衛さんの言葉だ。水屋とはその字の通り、茶室の台所にあたる場所。石毛さんの著書を読み進みながら、わたしはふとこの北村さんの言葉を思い出していた。日本の住居空間が、いつ

は必ずしも直接、関係ない工芸品や手仕事関係の美しい写真が多数組みこまれていて目を休ませる。要求を一ついえば、中に引かれる手仕事の原料、工程などについて、解説のほしいものが沢山あった。一々説明してもきりがなかるうが、要になるようなものにはお願ひしたかったと思う。例えば一三六頁、南蛮砂張サバザという金属など。

(林巳奈夫)

も客を招き入れることをひとつの要素とする、この閉された空間を析出していたことを。

この書は住むことの研究を目的とする著者はいう。そして第一部にはサバンナ、砂漠とオアシス、森林、島といろんな自然類型のなかでの住居がスケッチされる。図や写真も豊富にあつてなかなか判りやすい。第二部は住居空間のデザイン論、シェ

ルターとしての住居の意味から、その機能、さらに開かれた空間と閉じた空間として住居分割を考えるという視点が提示される。ついで住居様式の決定要因が、自然、生活、技術、家族、集落、社会、精神といった七つのカテゴリーとして指摘される。

ただこれらは著者もいうように、部族段階の住居様式の決定要因なのであって、近代あるいは現代の住居様式の問題にそのまま移行できるものではないことはもちろんである。だが問題はここにあるようだ。部族レベルとは異つたレベルの社会を考えるとき、こうしたカテゴリーによる類型化は、機能と隔離及び共有という空間概念——それも究極は機能に統一されてしまうのだが——とともに、これまで多くいわれてきた住居のデザイン論のなかに吸収されてしまうのではないか。リビングL、キッチンK、ベッドBをどんなに組合せるかが住居デザインの永遠の課題なのだし、それに労働と生産の空間Wも、かつての住居には必須の機能だったのである。さらにはIDKの住宅も広大な大邸宅も住居であることに変りない。それが住宅デザインの意味のむつかしさでもあるのだ。(吉田光邦)

## 安部健夫 『清代史の研究』

(A5判、七五九頁、創文社)

共同研究「雍正硃批論旨」は、独得のスタイルをもつ奏摺を、もっぱら「読む」ととカード化することに終始した。「硃批論旨」が、雍正時代の社会・経済・制度などに関するゆたかな資料を提供するものであり、その語彙索引の作成が、工具としてきわめて有効性をもつものであったことは否定できない。しかし奏摺自体は、なればさほどむづかしい文章でもないし、わざわざ何十年もの歳月を費して何人もの研究者が集って読まなければならぬほどのものではない。わたしはいささか疑問を感じたこともしばしばであった。しかし、安部教授の『清代史の研究』が刊行されることになってその校正を分担し、安部教授独得の筆づかいや細かな註記にさんさん苦労してみても、はじめて二十数年の昔、安部教授が「硃批論旨」のカード化を考えられた気がわかったような気がした。『清代史の

研究』のうち、「硃批論旨」を主たる資料としてそれを自由に駆使しながら書かれた「米穀需給の研究」や「耗羨提解の研究」などの論文は、「硃批論旨」がカード化されていないければ、とうてい書けない論文なのである。まるでモザイクのように、カードの断片的な資料を緻密につみ上げられていった、その構想力にわたしはあらためて感歎するほかはなかった。しかし「雍正史の一章としてみた」という副題が附されているように、これらの論文は、安部教授の雍正時代史のほんの一部——安部教授流にいうならば第何篇のうちの第何章かにあたるにすぎない(安部教授は政治・官僚・胥役・財政・土木・経済・社会・軍事・思想・人物という篇別構成を考えられているようであった)。ある特定の時代を断面として克明に浮上らせることによって清朝史全体への展望を切拓こうとされたその構想

は、安部教授の急逝によって挫折した。教授のいわれる「満州人の善意」などというものにはとうてい共感しかねるけれども、もしその構想が——その時代把握をもふくめて——否定的であれ、肯定的であれ、共同研究班全体のものとなっていたならば、共同研究「硃批論旨」はなお生命をもちつづけたかも知れない。これらの論文につづくべきであったいくつかの篇と章を思い、過去の共同研究がもっていた限界のようなものをあらためて感じないではおれないのである。

(小野和子)



## 色と空の学び

— 隋唐の思想と社会 —

「あなたは、京都大学の人文科学研究所にお勤めですね」

「ハイ」

「たいへん失礼な言い方かも知れませんが、人文科学研究所というところは、五百羅漢の洞窟みたいなところですね。わめき羅漢あり、なげき羅漢あり、むつつり羅漢あり、あばれ羅漢あり……いろいろな羅漢さんが勢ぞろいしていて、なかなか面白い。」

「……………」

「しかし、羅漢さんは多勢いらっしゃるが、菩薩や仏さんは、いらっしやらないようですね。」

「……………」

これは先日ちまたで行なわれたある会合での、さる有名な理科系の碩学と筆者との会話の一コマである。ことわっておくが、この碩学は理科系の学者でありながら文科系の学問にも広く通じ、仏教とくに中国仏教について

もなかなかの見識の持ち主である。

羅漢が多勢いて仏・菩薩がほとんど居ないというこの碩学の言葉が、いったい、わが研究所に対する讃辞なのか、貶辞なのか、また、その譬喩がうまく的をついているのか、ついていないのか、そのことを明らかにするために、先づ羅漢と仏・菩薩との仏教教理上における違い、さらにはまた、インド仏教における羅漢の性格と中国仏教ないしは中国思想（とくに芸術思想）における羅漢のそれとの違いが明らかにされる必要がある。

われわれの研究班は、この碩学の発言を一年前に予期していたわけではないが、羅漢と仏・菩薩との違い——小乗仏教と大乘仏教の違い——を般若学の立場から鋭く分析批判する七世紀の中国における仏教の碩学、吉蔵（嘉祥大師、五四九—六二三）の『三論玄義』——破邪顕正の巻——の会説によって開始された。

聞くところによると、われわれの研究班をボウズ学のお遊びグループと悪態(?)をつく連中もいるとか。しかし、中国におけるボウズ学をないがしろにしたため、これまでの六朝隋唐期の中国研究、とくに思想・文学・芸術のそれは、床の間の剪り花のように美しくはあるが、根のないものになっているのではないか。ボウズ学もまた、それが広汎な中国人の切実な関心と学習の対象であった以上、まぎれもなく中国の歴史であり、文学で

あり、思想なのである。われわれの好むと好まざるとにかかわらず、この時期の中国人たちは仏教のもたらした狂瀾怒濤とそれによる伝統的な文化の一大攪拌作用の渦中にあった。彼らは現代のわれわれよりも遙かに真摯な態度でボウズ学に取り組み、その中から彼らの新しい学問・思想・芸術を開花させた。ボウズ学はやはり六朝隋唐期の中国研究を飛躍的に推進させるためには絶対不可欠なのである。われわれが群盲の巨象を撫でる誇りに甘んじながらも、あえて『三論玄義』の会説に踏みきったゆえんである。

われわれの研究班の班員は、二三の仏教学専門家を除けば、ほとんどその教理のイロハさえ知らない新発意たちである。中国の歴史や文学に関してはそれぞれにひとかどの専門研究者であっても、色と空の世界の真理については、まだ嬰兒の段階といったところである。班員の仏教学者たちに手を取り足を取る啓蒙を受けたり、近ごろ角川仏教学で阿羅漢果を得られた上山さんにガイダンスを依頼したり、それこそ仏教にいわゆる四苦八苦のしていたらくであるが、それでも神妙に色と空の学びを重ねたこの一年間であった。

仏と菩薩の違い、菩薩と羅漢の違いは、漠然とながら理解されるまでには至ったが、わが研究所が羅漢の洞窟とよばれる確かな意味を理解するまでには、まだ程度

い。われわれの会説した『三論玄義』における羅漢は、まだインドから到来して日も浅く、後世におけるような中国的な相貌は見せていず、さまざまな風顛の羅漢たちも、まだ出現してはいないからである。

空の世界の真理を深く学んだ中国人たちが、色の世界の樂しさを今さらのごとく噛みしめ、絢爛たる唐代の文化を築きあげた経緯も、もちろんわれわれの重要な関心事ではある。しかし、このあでやかな色の世界に目を向ける前に、われわれの空の学びは今一步深められなければならない。昨年度の『三論玄義』の会説につづいて、今年度はさらに『大乘起信論』の会説が始められている。班員のひとりひとりが中国的な風顛の羅漢に近づくこと、それがわれわれの班の当面の課題である。班員は所内が九名、所外が三名。そのほかに会説参加者が多数。会説と併せて昨年度に行なわれた班員の研究発表は次のごとくである。

(福永光司)

五月十三日	研究班のプロゼクトについて	福永光司
六月十七日	六朝仏教における小乗と大乘	荒牧典俊
七月一日	六朝隋唐史の展望	磯波護
十月七日	仏典の漢訳	牧田諦亮
十一月十八日	仏教の論理	上山春平
十二月二日	六朝史と仏教	吉川忠夫
三月三日	六朝隋唐の文学と仏教	興膳宏

「大正デモクラシー」

という言葉

— 大正・昭和初期の時代思潮と世論 —

大正・昭和初期の時代思潮とか、世論とかいうことになれば、すぐ念頭にうかぶ言葉の一つに「大正デモクラシー」なる一語がある。とくに近年一般に広く用いられ、高校の日本史の教科書などにもしばしば顔を見せるほどに市民権をえたように見える。ところがこの言葉、実にあいまいでよくわからない言葉でもある。『大正政治史』や『大正デモクラシー史』を著わしてこの時期の研究に先駆的役割を果たした信夫氏自身もあいまいなものだと自らおっしゃるし、最近ではこれにわざわざ「状況」という一層あいまいな言葉を加えて「大正デモクラシー状況」と表現するむきもある。かと思えば、たとえば「民本主義」とか「普選運動」とか、さらには民衆の政治的・思想的成長をそれぞれに具体的に叙述はするが、こういう言葉を使わない方もある。

この研究会のメンバーもこの点では実に多様である。班長井上氏はこういう言葉を使われない。渡部氏を中心

として編集された『日本近代史辞典』にもこの項目はない。他方、有力なメンバーである松尾氏や太田氏には、この言葉を書名にされた著書があり、江口氏、飛鳥井氏、木坂氏らの参加された学生社の『シンポジウム日本歴史』は「大正デモクラシー篇」である等々。勿論それぞれに各自の定義とこの言葉を使う積極的な意味づけを持っておられることは言うまでもない。また使われないのには、それだけの根拠もある。だから研究会での討論も、おのずとこの辺の理解にかかわるところに及ぶことしばしばである。しかし、いまのところ、この議論は核心のところには及んでいない。勿論、一般的にこれを論じて結着をつけるなどとは意味のないことで、具体的に論じているといえはいる。だが、それぞれの論調の評価、意義づけということになると、この時期の理解の基軸にかかわってくるし、当然この言葉の検討にも触れざるをえないところとなる。そこまでは、いきかかっているところを、「異常なほど厚い報告メモが配布され、……一見小さい記事から、それぞれの時期の意識を探ろう」と、「権力論から労働運動論へと多岐にわたった討論がつみ重ねられているとは、本誌一号に掲載されたこの研究会の、なるほど「うまい」「公式的」紹介ではある。

(井口和起)

## オトナの哲学

——十九世紀フランス社会思想の研究——

「どうせ、タイシタことはでけへん」

「たいしたことやるとオツリがくる」

「まあオトナの哲学やるな」

誤解をふせぐため急いで申しますが、誰かさんを批判したものではありません。わが共同研究班の現状を突いたものとする向きがあるやもしれませんが（また少々は当たっているかもしれませんが）、本来はマルクスと対比してのブルードンの立場について言ったものです。

つい先ごろのこと、上山春平さんが、右のふたりの共通点を五つ、相違点を七つにまとめたのをめぐって、討論が白熱したすえの、ある対話を書きとめておいたものなのです。

例を一、二あげましょう。「社会変革の理論の科学的基礎づけのために、経済学をより所とした」のは、ふたりとも同じだが、「マルクスは暴力革命の必要を認めたが、ブルードンは認めなかった」、「マルクスが社会変革

の最後のきめ手を政治にもとめたのにたいして、ブルードンはそれを経済にもとめた」といった違いがある。以上のような点については、大体意見が一致したかに見てとれました。

今のべた相違点のうち第二のものを「飛躍対連続」と言いかえるのには、だいぶ異論が出ましたけれど、社会変革の第一段を政治⇨権力奪取とするか、それとも経済⇨農工連合体の構築とするか、という基本的な相違がふたりのあいだに存在することも、全員に認められたように思われます。

これを要するに——この辺からわたし一個人の感想にうつるのですが——エエカッコのマルクスにくらべると、ブルードンはどうもサエナイ。サエナイ男が共同研究のテーマの中心であると（学問の世界ではそんなことではアカンと言われそうですが）、どうも元気がでない。だがしかし——

タイシタことをやってオツリがでて、わが身ばかりか世間さまにまで迷惑をおかけする。そういう例は現在の世界にもこと欠かない。してみると、ブルードンのオトナの哲学は、まだ歴史によって検証されてはいないので異議ナラシと言うのはためらわざるをえないにしても、ナンセンスとしりぞけてしまうわけにもい

——そう考えて元気を奮い起こしている、これが、少なくともこのわたしの、今日このごろの偽わらざる心境と申せましようか。

(樋口謹一)

## 宇宙論的感情

——現代における知識の意味——

「現代における知識の意味」を問うという、私たちの共同研究が発足してから、私はときどき、宇宙論的感情、あるいは存在論的感情ということについて、ふと心を動かしている自分を発見している。

私自身、宇宙論的感情などというむづかしいものを体験したとは、思っていない。しかし、なにかそう呼ばれるような感情がありうることは、だんだんにわかっている。宗教的天才の胸中には、そのような感情が常時宿るのでもあろうか。ファウストをして、「生まれ、おまえはあまりに美しい」と叫ばせたのは、そういうものであったらうか。

なぜ私が、宇宙論的感情とか、存在論的感情などというものに、心が動くようになるのか、実はよくわからない。

い。ただ、知識へのあくなき努力といおうか、意味を問うことの真面目さといおうか、何かそういったものが、心を動かすようである。

知識へのいとなみは、しょせん、われわれのさかしらのなすわざにすぎない。われわれはいまもなお、バベルの塔を築きつつあるにすぎない。ふとそう思う。そうすると私はそこに、或る対極を予想するのかもしれない。われわれのいとなみを、さかしらのままに終らせないものは何なのか。バベルの塔を、まさしく天にとどかせるものは何なのか。

私は、現在の私たちのいとなみを、軽視しているのではない。ニヒリストとしていうのでは、もとよりない。それどころか、言葉を使い、知識をつくり、その意味を問いつめるものは、私たちの業でさえあるだろう。

ただ、私たちが、業にしたがって努力を重ねるとして、結局われわれはどこへ行くのか。あるいは、どこへ行くなどという性質のことではないかもしれぬ。なぜいったい、どこかへ行かねばならないのか。

このような自問に、自答があるかどうかさえ、私は知らぬ。そうしてまた、「現代における知識の意味」を私たちが問うとき、「意味」なるものは、どこから来るのか。

ひとつの旅のおわりに、北山のかなたに眼をやりなが

ら、「われは以前のわれならず」とつぶやくとき、その旅の意味はどこから来るか。それは、北山のかなたから、旅の回想とともにやってくる。知識の意味を問うような、すぐれて内面的な旅のおわりに、こんな旅におわりがあるとも思われぬが、北山を眺めてたはずむとき、この旅の意味はどこから来るか。それは、かなたから宇宙論的な感情とともに私たちを涵すことになるだろう。そのとき「意味」は、私たちの生命そのものになるだろう。

(藤岡喜愛)

## 「共同利用」としての研究会

——社会運動の研究——

研究班の一番末席につらなっている私に何か書くようにとのことで、参加される先生方の高説を拝聴し啓発されるばかりの私は、いささか困惑を感じます。しかし、共同研究の「官報」的報告から離れた、率直な感想を書くようにという意図と、うけとらせていただいで、感想めいたものを書かせていただきます。

この研究班は、研究所内の数多い共同研究の中で、異

色の存在ではないかと思われます。現象的には、それは研究班の参加者の巾広さとして、あらわれています。日本および諸外国の社会運動史上の諸問題から、現在の社会政策、労働問題、諸社会運動（部落解放運動や労働戦線統一問題等）の問題点といったすぐれて今日的な課題、さらには「革命と改良の原理的考察」といったものもふくめて、極めて広範囲のテーマが、隔週ごとの研究会にもちだされます。それは、例えば中江兆民とか、  
『東洋経済新報』の分析とかいった、限定された対象を分析していく共同研究にたいして、ある対比をなしているかのようです。それぞれの参加者の、個人ではまぬがれない局限された専攻分野から、より包括的・巨視的な視点へアプローチするという共同研究の在り方は、とくに若輩の小生などにとって、これほど望ましい形態はありません。共同研究は文字通り参加者の「共同利用」であるわけです。

しかしながら、研究会参加者の出入が多いという現象にもあらわれているように、巾広いテーマを概括し総括していくという作業は、目下のところ、研究会全体のものになりきれないという気がします。あたかも、岩波の『思想』を定期購読しながらも、自分に身近かな興味深い論題ばかりを読んでもしまうといったように、毎回の研究会の出席メンバーを、かなり雑多な変動多きもの

にもしているようです。

巾広いテーマの包括性と「共同利用」の中から、共同研究の新しいあり方をさぐるうと、班長の渡部先生はじめ、班員の方々の意識的になされた「巾広さ」ではありましようし、そのこともつ意味もまた大きいものでしょうが、それらの報告を、例えば具体的には報告集として、どうまとめていくかということは、究明すべき共通課題ではないかと思われまます。(田中真人)

## ベイリー教授の来講

— 敦煌写本の研究 —

三月から四月にかけて、日本学術振興会の「外国人流動研究員」計画によって日本に来訪したハロルド・ベイリー教授 Professor Sir Harold Bailey に請うて、三週間に亘って“Introduction to Khotanese Studies”の講義をしてもらった。

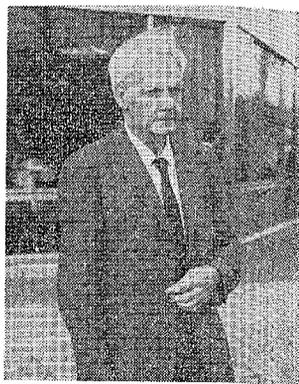
先生は一八九九年生れ、四年前にケンブリッジを停年退職した。一九六四年に私(藤枝)がケンブリッジを訪ねたときは、まだ現役で、サンスクリットの教授の席と

ともに由緒あるクインズ・カレッジのマスターをも勤めていた。『東洋史研究』が発刊されて間もない頃、故石浜純太郎先生が「ベイリー氏の近業」という一文を発表したのが、先生の名前とコータン語なる中央アジアの死語の存在とを知った始めであった。その時はロンドン大学のイラン学の教授であったが、やがてケンブリッジ大学に移り、サーの称号を得、現に王立アジア協会会長である。若年にオーストラリアの大学を出たという関係で、こんどのキャンベラの第二十八回国際東洋学会の名譽会長となり、その帰途に、この碩学を日本に迎えたという次第である。

京都の若い人たちが先生の特別講義を希望するので、先生は予定より一週間早く京都に来る、との知らせを受けたときは、ひとごとのように聞いていたが、だんだん様子が判ってくる、その若い人たちというのは、われわれの研究班の人たちが主力であって、若干の曲折のあと、講義はわれわれの研究班の延長という形で行うことになった。念のため申し添えると、コータン語の資料の過半は敦煌石室から出たものである。

講義の教材となったのは『法華経』を頌える詩で、やはり敦煌写本にもとずいて先生が校定したものである。

わたくし(荒牧)が、とくに感銘をうけたのは、つぎの三点。(一)テキストの一語一語の意味を定めるに、イラ



ベイリー教授

ン系・インド系諸言語の比類ない蘊蓄が、駆使される（ベイリー教授がいま準備しておられるコータン語語源辞典ができるまでは辞書など存在しない）。その知識が、現存最古の印欧語ヒッタイトから、ギリシヤ語、ラテン語、はては西北インドのカシュミールの山地やコーカサス地方で話される小言語にまで及ぶとき、ヨーロッパ文献学の偉大さの真髓をみるようであった。(一)中央アジアの匈奴族、トカラ族、サカ族、エフタル族などの民族移動を論じては、さまざまな定住民族ののこした記録とともに、コータン語史料が引証される。「いまやかれら自身が遺した記録によって、これら諸民族の歴史が知られる」。(二)中央アジア・コータンの仏教は、当然のことながら、インド仏教とも中国仏教ともちがう。たしかにそうだとテキストを読みながら感得した。「法華経」だけ

ら、一乗もあり三乗もある。その他のテキストには、阿頼耶識もあり如来蔵もある。それらが、インドから中国へうつりゆく、独自の仏教思想をあらわしている。それは、あたらしい仏教学のテーマとなる。

はや一カ月あまり、つらつら思うに、かの敵密でひろい文献学に比すべきものを、われわれは、少くとも中国学においてもっているであらうか。

(藤枝晃・荒牧典俊)

## 百花斉放・百家争鳴

— 辛亥革命の研究 —

ことしは、干支でいえば辛亥の年である。つまり、われわれの班の研究対象である辛亥革命の還暦にあたるわけである。

フランス文学者の石川湧氏は、テレビ解説者が辛亥革命をシンイ革命と発音したのに慨嘆したことがきっかけとなって、ファルジュネルの書物を翻譯(邦訳名『辛亥革命見聞記』)されることになったらしいが、そういえば、先日きた手紙の宛名には、カナモジタイプでイヌイ

カクメイケンキウカイドノとうってあつた。このこと  
 じたいは漢字の読みかたの問題にすぎないが、それ以上  
 のこととなれば、思ひなげにすぎることがあるであら  
 う。向上と普及の關係という面で、われわれの研究のあ  
 りかたに反省をうながしていることなのである。

しかし、ことはしかく簡単ではない。わが班は毎週、  
 研究発表・討論形式ですすめられているが、二十名をこ  
 える成員の問題意識・研究方法は、よくいえば百花齊  
 放、討論はまさに百家争鳴である。しかし、それはうら  
 がえせば、不統一のそしりをまぬがれず、共同研究のむ  
 つかしさを反映しているのである。たとえば、研究班発  
 足以来、アヘン戦争より人民共和国の成立にいたる中国  
 の近代を發展段階説との関連においてどう把握するか、  
 という問題にしても、前近代中国社会が自生的に資本主  
 義を生みだしえるものとしてあつたか、というてんでの  
 評価の相異とも関連して、いまだに結着がついていな  
 い。また、辛亥革命の把握に関連して中国近代史をいわ  
 ゆる旧民主主義・新民主主義革命の時代として把握する  
 のか、しないのか、つまり辛亥革命を旧民主主義革命期  
 における最後の昂揚としてとらえるのかどうかについて  
 もいろいろな意見がたたかわれている。わたくしは前  
 者すなわち民主主義革命説の立場であるが、後者の立場  
 の人のうちからは、最近では、『新民主主義論』にたい

する疑問も提出されはじめている。

これはかたんに解決できない問題ではあるが、われ  
 われとしては、来年に予定されている研究報告書におい  
 て、いくらかの解答を提出したいものと考えている。

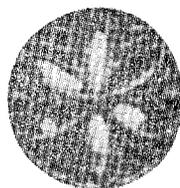
ほかに、西洋史研究者の参加により、国際関係面  
 の討論が活発になったことなど紹介すべきことは多い  
 が、最後にひとつ、はじめにかえって辛亥革命六十週年  
 にさいし、辛亥革命遺跡の參觀や研究者相互の交流にた  
 いする班員各位の希望の、とりわけ切なるものがあるこ  
 とを述べておきたい。  
 (狭間直樹)

ヨーロッパ學術調査

梅 棹 忠 夫

西洋部を中心とするヨーロッパ學術調査は、すでに  
 その第一期計画を二度にわたって実施したが、来年度  
 からその第二期計画を実施するために文部省海外學術  
 調査費を申請中である。テーマは「ヨーロッパ文化の  
 基礎構造」。地域はスイス、東地中海、西地中海を予  
 定している。隊長は会田教授、隊員は西洋部、日本部  
 から七人が参加する。ほかに、これとあい補う形で、  
 より長期の滞在調査研究を実施する計画で、その予算  
 も申請中である。

# 研究ノト



日本における

ジャードイン・マセソン商会

山本有造

ジャードイン・マセソン商会 (Jardine, Matheson & Co.) の盛名と悪名はつとにたかい。東インド会社の独占に挑戦し勝利した自由貿易商人の先駆者として、デント商会とならぶ阿片取引の巨頭として、横浜居留地貿易の開拓者「英一番館」として。したがって、イギリスの東洋貿易を軸にするインド・中国・日本の近代史研究者にとって、それはごくなじみぶかい名前にはちがいない。しかしながら、その活動の歴史と実態を知る人は少ない。

先進資本主義列強と閉鎖的アジア社会の接触は、決して(自由貿易経済論が予定するような)平和的で互恵的な交換によってはじまりはしなかった。だから、たとえ幕末開港期の歴史をまず外交史的にみることは、正しくもありわかりやすくもあつた。しかしそのことが、(利己的で手におえない)商人たちの活動を、したがって貿易活動の具体的な諸相を正しく理解することをさまざまはしなかつただろうか。もちろん、かれら商人たちを、結局は本国の産業資本家たちの代理人にすぎなかつたというの基本的には正しいだろう。にもかかわらず、アジアが生みアジアが育てた現地商業資本にはまたかれらなりの価値と行動の基準があつたにちがいない。そしてかれら利己心と冒険心にとんだ商人たちこそが、全く異質の二つの社会の接触を具体的に媒介するにない手だったのである。

インドが生み、中国がそだてたジャードインとその追従者たちは、日本に何を求め、日本で何を為したのだから

うか。その軌跡を知ること、イギリス資本のアジア侵略という世界資本主義の大きな枠組のなかで、日本のおかれた特異性をみつづけるカギを示してはくれないだろうか。

一九三五年に資料として再発見され、ケンブリッジ大学図書館に移管されたジャーディン・マセソン文書(J. Jardine, Matheson Archives)は、ジャーディン研究とそれから派生する幾多の経済史的・経営史的研究の宝庫となったが、しかしその量のあまりの膨大さと保管の厳重さが、それに接しえない日本人研究者をやや絶望的にしているのが現状である。しかし他に比肩しうる根本資料のない以上、いずれはこれに本格的にとりくまざるを得ないだろう。

## 巡礼、旅に群れる

樺 山 紘 一

永らくの固定に安んじていた社会が、転形の子兆を帯び始めるとき、人は言いしれぬ不安にかりたてられて、他

者と宗教的激情をわかちもたくなるものらしい。十二、三世紀ヨーロッパの聖地巡礼の盛行は、そうとでも考えなければ、解しようがない。

十字軍に護られてのイエルサレム巡礼行や、やや来歴豊かなローマ、コンポステラ詣でだけではない。ローマの司教区トウルは六十余の聖地を、ケルンの大司教区は五十余の聖地を、十二、三世紀の間に新創したと伝えられる。ある計算によると全ヨーロッパではその二百年間になんと一万余を越すであろう、という。十字軍によって齎らされた聖遺物の存在地、はたまた「われらが婦人」聖母マリアが出現したという奇蹟の地、が聖なる地に祝別される。ケルンの大聖堂には一日に百人をこす巡礼者が訪れたと、年代記作家が慣わしにかなった大仰さで語っている。かれらは貧しい服に身をつつみ、懊悔の言葉を唱和し、数人または十数人の団体をなして——やや後世に属する木版画はそのように描いている。

抜目ない物知りたちは『巡礼旅案内』なる銜学の書をも、し、村の司祭はこれをなまかじって、巡礼の効験を説教したことであろう。たまたま手元にあるその一例は、拙い中世フランス語で書かれ、トウルからローマ、コンポステラに至るまでの著名な聖地の由緒について、いっかな興趣を催さぬひからびた叙述が続いている。これにはさしも日本交通公社発行の『旅行案内』も顔色を失な

## 人のうらさき

うこと疑いない。ただし、この旅行案内記の伝統は、どうも高雅なラテン語紀行文とは別個のジャンルをたもつて、その数おびただしく後世に続くようだ。巡礼行に味をしめた人間は、そのうちにマリア様詣でをダシに使い、生着の村や町を抜け出ることを覚えただろうから。ローマまでとは言わずとも、一週間ほどの予定に物見遊山をもちこんで、近在の町へ行ってみよう、懐軽しと言えども志清純と見えれば、村の教会が飢えと夜露から身を守ってくれるだろう。

これらもろもろを、私が不案内な江戸後期社会との類比でかんがえている、ということをいままさら隠すのも無駄というものだろう。『武江年表』の元禄以降の条下に見える、寺社開帳の無数の記事。伊勢詣での間歇的な沸騰。やがては物見遊山の流行と名所図会シリーズの発想へ——云々。ただし、たしかに『江戸名所図会』を旅案内として読めば、『巡礼旅案内』よりは多少なりとも生彩に富んでいる。このことは幕末の篤学者、斎藤月岑翁のために弁じておかねばなるまい。

(樺山紘一)

松尾尊允助教(日本部)は、文学部助教に配置換(一月一日付)。

熊倉切夫氏を助手(日本部)に採用(四月一日付)。

桑山正進氏を助手(東方部)に採用。

古屋哲夫氏を助教(日本部)に採用(以上五月一日付)。

梅棹忠夫教授は、韓国・嶺南大学で開かれた日韓エスベラント

会議出席のため、四月二九日大阪空港発、五月六日帰国。

井上清教授は、日本と中国の近代化の比較研究のため、中華

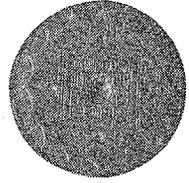
人民共和国へ、五月一三日出發、六月一二日帰国。

田中重雄助手は、京都大学第二次中央アジア學術調査より、一

月一三日帰国した。

飯沼二郎助教は、第一八回東洋学者會議とオーストラリア農

業調査とより、一月二一日帰国した。



## 講演

### 十二支の起源

G・ファン・エスブロック

一九七二年四月一〇日  
於 本館考古学研究室

十二支の文字として現在知られる最も古い形である殷時代甲骨文字を、一月のうちの各時を象徴する記号という方向で解釈する。

亥(𠄎) 午後十時 テントのカーテンを引き合やす形。

子(𠄎) 午前〇時 障立の上から頭がのぞく形。

丑(𠄎) 午前二時 指を曲げて愛撫する手つき。

寅(𠄎) 午前四時 二人が互に抱き合ひ形。

等々。古文字に関連して中国文化の起源についても独自の見解を披瀝された。中国文字が最初に作られたのは、後の文化の中心地よりもっと西方、砂漠に接する地方であった。西

(⊗) という字は水を満した革袋の象形で、西方の砂漠を旅するための必需品。東(⊗) は荷物を袋に入れて両端をくくった形で、東方はこの形に荷造りされた貿易品(絹)の来る所。翌(⊗) は空の革袋の象形で、西方への旅立ちは翌日への意。残念ながら紙面の都合で独創と機智に富む講演のほんの一端しか紹介できない。

講演者は、ベルギーのゲント大学のもと鉱山学教授。退官後、従来より関心のあった中国古文字学の研究に従事、本年初にキャンベラで行われた第二八回東洋学者会議に研究発表(Thesocalled Eclipse in the *Shu-King*) のため出席し、その帰りがけに貝塚茂樹氏を訪ねて京都に寄られたのである。中国語は勿論、日本語も読む方は不自由ない。欧米人ではほとんど唯一人の中国古文字学の研究者。(林巴奈夫記)

### 遊びと聖なるもの

ロジェ・カイヨワ

一九七二年四月二六日  
於 本館会議室

フランス文化使節として来日中であったロジェ・カイヨワ氏が研究所を訪れた。氏は一九一三年生れ、社会学者としての他、文学者、美学者としても多彩な仕事をしていて、去年暮にはアカデミー・フランセーズの会員に推挙されたばかり。

研究所では、カイヨワ氏を囲んで、遊びと聖なるものをもめくつての討論会がもたれた。

席上、まずカイヨワ氏が、「遊びと聖なるものについて考えたのは三十年前。今日はむしろ、みなさんの意見を伺いたい」と前置きしてから、人間の文明における聖なるものと遊びとの関連についての自説を述べたが、最後に、氏がわけた遊びの四つのカテゴリのうち、競争と偶然とは「俗」に結びつくものであり、模倣と眩暈とは「聖」に結びつくものだという、新しい仮説を提出した。氏はヒッピーを例にあげて、「彼らが異常な服装をするのは模倣の遊びと考えられ、踊りや薬に陶酔するのは眩暈の遊びと考えられる。彼らはこの二つのものを結びつけることで聖なる世界に向かおうとしている」と述べた。

これに対して、作田啓一教養部教授は、シャーマニズムの例を出して、「模倣、眩暈はむしろ、聖なるものと遊びとの両方にまたがるものではないか。聖なるものは俗を再生させ

### 将来計画・アジア諸地域の伝統技術調査

吉田光邦

はじめから量産社会で成長した人びとがふえるにつれて、物の意味はしだいに變化してゆくようにみえる。量産社会の物はもはや確固とした存在ではなくて、むしろ瞬時に消費されて消えてゆくものなのだろう。今日の芸術のなかで観念芸術がブームを呈しているのは、その一端であるといつてよ

る力を持っているが、遊びは俗を新しくするという力を持っていない。カイヨワ氏が批判したように、ホイジンガの理論では眩暈が欠落しているが、これは遊びについて純粋に考えたが故ではないのだろうか。遊びの中に俗を再生する力を証明しえないとすれば、あなたは何処に遊びのポジティブな力を認めるのか」と訊ねた。

カイヨワ氏は、答へに際して、氏のホイジンガに対する考えを繰り返して述べたが、充分な解答になつたとは言えぬようであつた。

この後、羽田文学部教授から、遊びについて考えたその発想は何か、という問いが出されたが、カイヨワ氏は「いろんなものに応用できる、幅の広いモデルとして遊びを考えついた」との答。

それから、聖なるものと遊び、プロテスタントとカソリックとの関係についての桑原武夫名誉教授の発言、その他の応酬があつた後、討論会は終了した。(文責多田)

い。そしてそれは世界的なひとつの動きでもある。

そんなときにもうすぐ消えていってしまふ、アジア諸地域の伝統的な手仕事のあり方を記録してみようとするのが、この調査計画である。一年おきに二乃至三ヶ月、手仕事の現場をながめてみたい。わたしは日本の特徴ある手仕事についてはかなり観察をすすめてきたし、西アジアに関しては京都芸大の小山喜平氏とともに調査を一応すませた。その方向をインド、東南アジア、そして中国と拡大したいのがわたしの考えである。

## 水野清一君を偲ぶ

長 広 敏 雄



水野君は全生涯を東洋考古学のために尽したひとであつた。東洋の先史考古学、仏教考古学、美術考古学などの方面にも全力を以て開拓のシャベルを打ちこむという、ちょっと世界中でも類のない学者であつた。昭和三年三月、京大卒業と同時に彼は東亜考古学会の北京留学生になり、東大の江上波夫、駒井和愛、三

上次男の諸君とともに中国大陸の発掘調査事業のメンバーを買つて了。水野君は東方文化研究所の所員になつてからも、東亜考古学会の調査事業に首をつつ込んでいた。彼と私とは昭和十一年の華北の仏教石窟調査以来、共同・協力の間柄になつたが、中国大陸の諸経験では彼の方が一足さきにスタートしていた。そのときの調査は、河北・河南省境の南北響堂山石窟一〇カ所、河南省龍門石窟一〇数カ所。そして期間は二週間。のちにこれは二人の共著で二冊の研究報告書を出版した。もっとも大規模な山西省雲岡石窟の調査は昭和十三年から十九年まで七年間、これは彼と私との綿密な協力でうまくまとまつた。戦時中で苦勞が多かつたが、水野君としてはもっとも充実していた時代といえる。朝日文化賞、学士院恩賜賞は水野君と私との共著にあたえられたが、結局、昭和三十一年に雲岡全十六

卷三二冊の出版を完了するまでが、われわれの二十年の共著時代であった。

そのご水野君は研究所で「仏教芸術研究班」を主宰し、それと平行してイラン・アフガニスタン・パキスタン京大調査隊の隊長となつて活躍をはじめた。本来、この二つは彼の頭のなかでは一体たるべきものだったろうが、事実上は分裂してしまつた。さらに中国考古学の分野において発掘も実地踏査も不可能ならば、やることはないとは言わないまでも、水野君はやつてもつまらないと考へていたようで、そのため、もつぱら発掘のチャンスのあるガンダーラ考古学に専念したのである。



発掘したチャナカ・デリー「六柱の間」  
(1962年)

I A P E 調査隊の活動は水野君のいのちを奪う結果をもたらしたが、発掘事業なくしてなんの考古学ぞや、とつねづね主張していた彼であるから、その主義を最後まで貫いた堅固な一徹さには、なにびとも頭をさげねばなるまい。

水野君はちよつとやそつとでは動かない巨石のごとき人柄であつた。彼よりも年長者でありながら、彼の人柄に舌を巻いた人々は少くない。私は最近の彼の交友は知らないが、苦しかった戦中・戦後の大陸調査事業では、軍部の大物でも民間の有力者でも彼に数歩ゆづつていた人は一二ではない。彼はまじめで慎重で、牛のように粘りつよかつた。仕事に対して弱音を吐いたことはなかつた。が、私事については急に弱く、やさしくなるところがあつた。私事というものは相手によつて色々に反応するのだから、私以外のひとたち、特に若いひとたちが水野君をみる目は別にあるだろう。私の彼を偲ぶことがらは、ほとんどが五十才ごろまでの水野君である。ともあれ、彼のごとき考古学者は世界でも無類だし、将来、出現することは、多分ないと思う。

## 旅だより

### テীগの講演会

梅 棹 忠 夫



キョンジュ（慶州）のブル  
ゴクサ（仏国寺）にて

テীগ（大邱）での学術講演会というのは、おどろいたことには、公開なんだそうです。テীগへついた夜、ヨンナム（嶺南）大学のイ・ジョン・ハ（李鍾河）教授からそのこと

をきかされて、あわてました。

こんどわたしを韓国にょんでくれたのは、おなじヨンナム大学の、イ・セン・グン（李瑣根）総長だったのです。それで、一、二度の講義と討論会出席は覚悟していたのですが、もちろん学内の、専門家ないしは学生あいてのものを予想していたのです。それが、一般市民に公開で、しかも「学術講演」をやってくれというのです。もうすっかり準備ができていますから、にげるわけにはゆきませんよ、といわれて、度胸をきめました。

会場は、市内のどまんなかにある銀行の講演室でした。聴衆は百数十人でしようか、大半はわかい人でした。わたしが主賓のようなかつこうで、おおきな花束をもらい、おもはゆい感じでした。

講演は、全部エスペラント語でやることになっています。この「韓日文化交流学術講演会」の演出をやったのは、主としてヨンナム大学を中心とするこの都市のエスペランチストたちで、エスペラントの実用性を宣伝するいい機会だからというので、こういう公開講演会ということになってしまったのです。もつとも、わたしの側からいっても、これはたいへんありがたいことでした。韓国での講演を何語でやるかは、出発前から頭のいたい問題でした。わたしは韓国語は、むかしいくらか勉強したことがあります、字はよめますが、しゃべるほうはカタコトだけです。韓国の知識人は、わかい人は日本語をしりません。中年以上の人は、まず例外なく完全に日本語をこなしていますが、戦前の日韓関係をかんがえ、この人

たちにとって日本語とは何であったかをおもうと、日本語でやりますからよろしく、などとは、とてもいいだしにくいのです。ひょっとしたら、むこうの学者たちとの交流は英語でやらねばならんかもしれない、などもかんがえましたが、これもまた、すくなくともわたしにとっては、苦手であり、また屈辱でもあるわけです。それが、エスペラントのネットワークにのつたおかげで、心配がなくなりました。エスペラントでやれば、全部通訳してくれるというのです。これなら、気兼ねや屈辱感なしに、のびのびとやれます。

わたしの前の講師は、イ・デヨン・ハ教授でした。演題は「朝鮮王朝における身分制度」というのでした。イ教授は、ヨナム大学の法学部長で、法制史の専門家です。「朝鮮王朝における労働法制」という大著があります。かれは、エスペラントで話をして、あとから自分で韓国語に訳しました。わたしたちには、まったくはじめてきく話で、たいへん興味ぶかいものでした。

わたしは、「文化人類学からみた韓国と日本」という演題で話をしました。通訳は、ソウルのミョンデ（明知）大学のキム・テ・ギョン（金胎京）教授でした。わたしの講演の内容は、「文化人類学からみた……」という演題にはすこしそぐわないものであったかもしれません。日韓両民族の文化を比較してみると、両民族の類縁のちかさ、あるいは起源の同一性を暗示しているとおもわれる現象がたくさんあるのですが、そのことについては、わたしはふかいらいせずに、もっぱら両民族の文明的比較に話題を集中しました。巨大な中華

帝国の周辺国家としての運命の共通性と、半島か島かのちがいがらくる異質性についてかたりました。日本の家族制度と韓国の親族制度の社会人類学的比較研究などは、この観点からみて、たいへん興味があります。

ところで、この講演のさいちゅうに、ふしぎなことがおこりました。わたしは、韓国の文化をもっともよく理解していた日本の文化人類学者として、昨年なくなった泉靖一教授の名をあげ、その業績を紹介したのです。そして、その名を、黒板におおきな字でかきました。そのとき、一人のわかい女性がつつましやかに会場にはいつてきました。わたしはもちろん、だれだかしらなかつたのですが、講演がおわってから紹介されて、びっくりしました。そのお嬢さんこそは、泉靖一教授の遺児、泉ユカさんだったので、ユカさんは、父君の志を以て韓国文化を専門に研究するために、こちらに留学し、いまはソウル大学で研究しておられるのですが、きょううたまたまテグにやってきて、わたしの講演があるときいて、会場にこられたというのです。わたしたちは、泉教授の霊にみちびかれていたのではないかと、たいへんふしぎな気がいたしました。

ユカさんとは、その後、キョンジュ（慶州）でもばったりあい、さらにソウルではいろいろお世話にもなったのですが、もう紙数がつきました。テグで話だけでおわりにします。

## ハーバードだより

山下正男

人文のみならず、長らくごぶさたしてしましましてすみませ  
ん。そろそろハーバードでの生活も一年近くになってしまし  
た。やはりこれくらい一つところに腰を落ちつけていま  
す。旅行者の単なるとおりすがりの観察とはちがった面白い  
発見がいくらかもあるものです。しかしとりあえず、二つのト  
ピックに限って御報告することにいたします。

私がみたアメリカのいくつかの本屋は、哲学、文学、科学  
などといったありきたりの配列以外に、いろいろとおもしろ  
い特別コーナーを設けています。それを列挙しますと、(1)  
ecology。単なる生態学だけでなく、自然破壊の問題が中心。  
environmentとしてゐる本屋もある。(2) urban studies (都  
市問題) (3) dissent。これはベトナム反戦、大学暴動、徴兵  
拒否等の本が含まれている。(4) radical studies。マルクス、  
レーニン、毛沢東などの英訳書が含まれる。(5) Afro-Ame-  
rican studies。あつは black studies。アフロアメリカンと  
はアメリカ黒人のこと。(6) occult。東洋の神秘主義(易、ヨ  
ガ)、西洋の悪魔学、魔術、占星術、骨相学、錬金術等々。  
正統的なヨーロッパ思想にあきまらない学生は左翼思想があ

るいは神秘思想のどちらかを選ぶようです。(7) Judaica。ユ  
ダヤ人、ユダヤ思想に関する書物。ユダヤ人はアメリカでは  
実にのびのびと羽を広げて活躍しています。(8) Progresses。  
いわゆる未来学もこのコーナーに入ります。(9) Little publi-  
cations。政治パンフや同人雑誌のたぐい。日本では手に入れ  
にくいものがほとんど。

アメリカというところは宗教のデパートみたいなところ  
で、ほんとにいろいろな教会や寺院があります。つぎのよう  
なところへかけて礼拝に参加しました。(1)ユダヤ教の会堂  
(チャーチといわずにシナゴグあるいはテンブルといいま  
す)。会堂の正面にトラーという大きな巻き物が安置して  
ある。(2)エビスコバル(監督派)。これはいわゆるピュリタ  
ンでなしに英国国教派のキリスト教。アメリカの上層階級が  
この派に属する。(3)長老派。これはもちろんピュリタン。(4)  
ユニテリアン。(5)コングリゲーションナル。(6)メソジスト。(7)  
バプティスト。牧師が戦争課税不払いを呼びかけていま  
した。(8)クエーカー。伝統的な反戦主義者。しかし彼等の宗教  
的集会は無言の瞑想に終始します。(9)ローマン・カソリック。  
イースターの一連の行事に参加しました。(10)ギリシア正  
教。カソリックより一週間おくれのイースターに参加しまし  
た。すべてギリシア語です。(11)モルモン教。本山のソールト  
・レークへも行きました。(12)クリスチャン・サイエンス。本  
山はボストンにある。(13)ルター派。(14)スウェーデンボルギア  
ン。(15)アルメニア教会。アルメニアは世界最古のキリスト教  
国。トルコ治下で弾圧されてアメリカに逃れたもの。(16)フリ

ー・メーンソンの会堂。これは秘密結社ですので集会の参加はできませんでしたが、会議や入会の密儀をやる部屋をみせて、親切に説明してくれました。これからいってみたいと思ふところは、(1)メノナイト(アナバプティストの一派)。早くからヨーロッパを逃れてきたキリスト教異端。(2)ロシア正教。(3)アメリカの仏教教会。その他儒教あるいは道教関係の集り、ヴェーダンダ教会などです。くわしいことはいづれ帰国のうえで。それではみなさまの御健康を祈りつつ。一九七年五月二十四日。マサチューセッツ州ケンブリッジ市にて。

## 真夏のオーストラリア

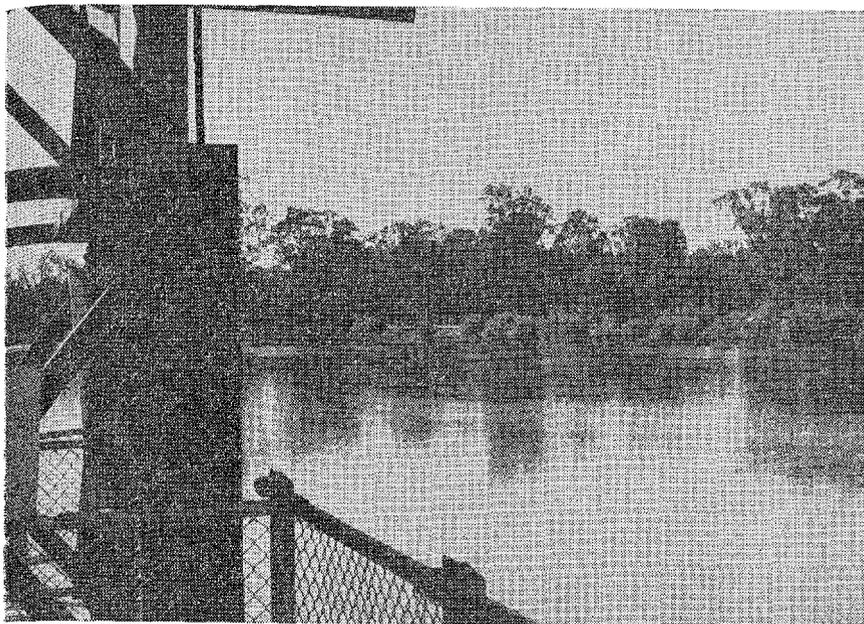
飯 沼 二 郎

オーストラリアに行く機会があるとは、おもってもみなかった。それが、第二八回国際東洋学者会議に出席するため、首都のキャンベラに出張することになった。会期は一九七一年一月六日から一二日までの一週間だが、ふたたび、この国を訪れる機会があらうとも思えないので、この機会に、できるだけ、この国の社会、とくに農業についてみてくることにした。さいわい、一カ月半の出張を認めていただいたので、昨年の一二月七日に大阪空港を出発した。

シドニーに一週間、キャンベラに四週間、メルボルンに二日、タスマニアに五日という日程のあいだに、できるだけ、その付近の農業をみてまわった。いちばん西は、ニュー・サウスウェルズ州のリートンで、ここは濠洲最大の灌漑地域の中心地である(写真は同地の灌漑用ダム)。羊毛、果物のほか、コメまでできる。それらの八割以上が輸出される。肥後米を先祖とするコメの最大の輸出先は沖繩であった。

日本の農民にくらべて、この国の人々は国際感覚が豊かである。一九七二年の沖繩「返還」以後、この沖繩へのコメの輸出は止まるだろうと、人々は心配していた。この地方のコメの単位面積あたり収量は世界最高であり、平均収量でも日本の約一・五倍である。しかし、この国の安くてうまい日本米を買ってくれる国がすくないので、コメの生産は農家一戸あたり六〇エイカーに制限されている。リートンに住むロビンソンさんと日本人の夫人に、すっかりお世話になった。

オーストラリアは、おそらく、こんにち世界で最も親日的な国ではないだろうか。もちろん、ゆきずりの旅人には、彼らの心の中まではわからないし、そして、それは、なによりもまず、最近における日濠両国経済の緊密化、というよりも、むしろ、対日輸出額の増大によるものではあるが、四五日間の濠洲旅行中、つねに人々のあたたかい好意に支えられ、きもちのよい旅をつづけることができた。彼らの日本にたいする関心は強く、また日本についての知識が、私たちの濠洲についての知識よりも、はるかに普及しているようにおもわれた。



東洋学会は地域別とテーマ別の二部に分れ、さらに前者は六、後者は八の部会に分れ、他に極東先史学と図書館学の特別部会があった。私は二部の「農業における新技術のインパクト」部会に一週間しばらくつけられていたので、他の部会のことは一切知らないが、たいへん有益な学会であった。

三〇人も入ったら一杯になってしまいうような小さな部屋で、一回三時間の会を六回。まず一人二〇分の報告を二人（第一日目のみ三人）がやって、二〇分ほど休憩（このときにお茶とビスケットが出る。私たちの研究会とちがって、お茶を飲むのは、このときだけ）後、その報告についての討論がおこなわれる。この討論はひじょうに活潑だったが、円卓をかこむ人々が小人数でもあり、顔ぶれが、毎日ほとんど固定的で親密にもなったので、どんなに激しくても、なごやかさを失わなかった。報告者全員のペーパーが、すでに学会の始まる一カ月前に全員に印刷・送付され、あらかじめ読んでおくことが要求されていた。それらは、いずれも長文で、中には五〇ページ近いものもあり、当日の報告は、その要旨を報告するといったもの。学会というよりも、私たちが日頃おこなっている研究会のようなものであった。

それは、この学会のおこなわれたキャンベラの国立大学における研究会の在り方にしたがったものようであった。国立大学は School of General Studies と Institute of Advanced Studies に分れ、前者は日本の大学の学部・大学院にあたり、後者は五つの研究所より成っている。これらの研究所が、さらに五、六の部門 (Department or Faculty) に分

れ、その部門の一つ一つが、だいたい私たちの人文研ほどの大きさのようであった。

研究所の研究員が、個人研究のほかに一、二の研究會にぞくするのは、人文研と同じだが、研究會はふつう三月、長くは半年（稀に一、二年）、毎週規則的には行わないが、ときには一週二回おこなうこともあり、必ずペーパーをあらかじめ

### 東洋学文献センターの任務と現状

日比野文夫

利用状況 東洋学文献センターにはいろいろの任務が課せられているが、その一つはわれわれ人文科学研究所がもっている文献資料を広く公開して、世界の東洋学界に貢献することである。もちろん、そのためには東洋学研究に必要な資料をさらに積極的に蒐集して、より完全なものとし、所の内外を問わず利用者の便宜を計らねばならない。これもセンターにとって大切な任務の一つである。

ところで現在われわれ人文科学研究所員は別として、この施設を利用して利用している人は、昭和四五年四月から四六年三月までの一年間に、閲覧者は一、四三六八、その中の半数に近い六三〇〇人が外国人である。またマイクロフィルムやエレフアックスによる資料撮影や複写の申込は二八七件、中の一六六件が外国人または国外からのものである。従って、これら外国人との応対や国外との通信など、センター職員を除いた労苦がなみ大抵のものではないことが、おわかりになると思う。全く外国係りの専属者が一人はいくらいいである。目録の作成 もともとセンターにはそれほど国際的な役割は期待されなかったはずだが、考えてみるとそれだけの理由はあるのだ。というのは、われわれの研究所では先人が図書目録の作成には非常に力を入れ、早くわらわりの研究所では先人が図書目録の作成には内外に行きわたっているからである。もつとも新しい「漢籍分類目録」付書名著者名索引」は、昭和三八年までのものを収録しているが、大へん便利なので、世界中たいいての図書館における漢籍整理のお手本になっているくらいだ。その後の増加分の目録も、漢籍委員会を中心に図書室と協力して早く作らねばならない。

め作り、回覧してから会合する。人数は約二〇名。内、所内の研究員六名、所外から六名、学生（修士、博士）六〜一〇名くらい。これらの大学院を終えた学生の、研究所における研修期間は三、四年である。私たちの日本の研究所も、学部と大学院の教育は学部におまかせして、大学院終了後の人々の研修にこそ重点をおくべきではないかと、私は考えた。

それとともにセンターが中心になって作っているのが、昭和九年以来継続している「東洋学文献類目」で、毎年出版される東洋学関係の内外雑誌の論文や単行本の分類目録である。これも、もとは漢籍と並んで、所蔵の定期刊行物を、専門家にもっと利用しやすいよう公開する意味をもっていたのであった。ただ遺憾なのは、重要なものだから類目には収録しても、経費不足で購入できないものが相当多いことである。ともかく、われわれが海外の東洋学研究機関をおとすれたとき、どこでもお目にかかるのはこの「漢籍目録」と「文獻類目」であって、おかげでジンプンカガクケンキューションのものだといえれば肩身が広い。

資料蒐集と調査 これまでセンターが主としてやってきた仕事のうちで、まともだったものは写真による明代資料とくに明人文集の蒐集で、今日その数は一千部近くになった。多くが東京の内閣文庫や静嘉堂文庫などの所蔵本で、撮影にはずいぶんお世話になったものである。これは非常によく利用されていて、そうした文庫をいちいち廻って歩くよりも、センターに来た方が一度にみられて便利だといえるので、わざわざ東京からこられた人もあったほどである。このような事業は、今後も重点的にやって行きたい。

つきには、これこそセンター本来の任務といってもよいもので、国の内外の東洋学文献を調査し、その所在を明らかにして、最終的には総合目録を作る仕事である。これは大事業で、非常な年月と労力を要するものであるこというまでもあるまい。東京大学の東洋文化研究所のセンターではすでに国内調査をはじめたので、われわれの方では東アジア地域より着手して海外調査を行なう計画を立てている。その一つの試みとして、漢籍整理についての講習会なども、センターがお世話して聞くことを考えている。

書いたもの一覽 一九七一年一月―五月

(五十音順、○印は単行本)

・会田雄次

若者の不安にどう答えるか  
予言者サヴォナローラとその運命

自由 一月号

――もう一つの「三島事件」――

諸君 三月号

努力大きければ

PHP

特別編集号 四月

不安が日本人を急がせる(座談会)

経済往来 五月号

この困った押しかけ古女房

――脱アメリカ時代――

月刊ペン 五月号

・飛鳥井雅道

◎大杉栄『自叙伝・日本脱出記』(校訂・解説)

岩波文庫 一月

狂気が切り拓くもの

朝日ジャーナル

新年号

プロレタリア文化運動の時期区分(中)

文学 三月号

叛逆の思想の系譜

月刊百科 五月号

・愛宕元

唐代後半における社会変質の一考察

東方学報 四二冊 三月

・荒井健

◎内藤湖南 近世文学史論へ序論・儒学

(現代語訳)(日本の名著 四二巻)

中央公論社 三月

ある盗品リスト

サンケイ新聞 五月二三日

・飯沼二郎

見えない人

キリスト新聞 一月一日

日本の反動化とキリスト者の任務

福音と世界 一月号

旧新約聖書

未来 一月号

もつと濠州に関心を

朝日新聞 二月一〇日

遠い国の話

キリスト新聞 二月一〇日

真夏のオーストラリア

毎日新聞 二月二六日

大江健三郎論

思想の科学 二月号

山村における家族の生活(共編)

人文研 三月

七一年は如何なる年か

ベトナム通信 三七号 二月

日本史における型と線

人文学報 三三二号 三月

沢崎堅造の学問について

共助 二・三月合併号 三月

なぜ「反ヤスクニ」は盛り上がりがないか

キリスト新聞 四月三日

マジメとフマジメ—東京人と京都人—(上・下)

共同通信系各紙 四月中旬

・上山春平

記紀神統譜の東アジア的背景

中央公論増刊号 四月

◎日本の思想

サイマル出版会 五月

信仰・階級・市民(一〜四)

教団新報 四月一七日、二四日、五月一日、八日

春秋 一二二号 四月

宗教と政治

キリスト新聞 五月一五日

石田最高裁長官

ベトナム通信 四〇号 五月

日米両政府のベテ

朝鮮人 六号 五月

新しい民族文学への希望

・石毛直道

共同通信系各紙 一月

食事と料理

食生活 一月号

人類にとって食うことは?

鹿島出版会 三月

◎住居空間の人類学(S・D選書 五四)

近代建築 三月号

地域開発によせて

人文学報 三二一号 三月

住居空間の開きかたと閉じかた

甘辛春秋 春の巻 三月

世界のなかの中国料理

井上忠司

・今井清

唐代史料稿 大和元年・二年(共編)

東方学報 四二冊 三月

◎白氏文集 卷三・四・六・九・十二・十七(共編)

人文研 三月

◎日本の思想

・梅棹忠夫

日本人と自然(対談・井上靖)

共同通信系各紙 一月

第二回バイオニア旅行記選評

旅 一月

日本人の持つ東南アジア観(討議・石井米雄)

神戸新聞 一月三日

解説・今和次郎集・第一巻『考現学』

ドメス出版 一月

酒びたりの正月——公私拝見

週刊朝日 一月二三日

考現学と世相史(上)——現代史研究への人類学的アプローチ

季刊人類学 二巻一号 一月

現代を生きること(対談・湯川秀樹)

講談社 二月

(湯川秀樹編『平日閑談集』)

この海をかけ橋に(座談会)(新潟日報編『あすの日本海』)

新時代社 二月

サルと自然観(守随・長谷川編「現代文」) 数研出版 二月

隠遁生活の理想「すまい随筆」 篠田銘木店 三月

理論人類学の研究 人文 二号 三月

エスベラントと人類学(1) La Movado h-ro 243 四月

科学と文化(対談・湯川秀樹・再録)

(原簿編「ヒトは救われるか——未来社会考」)

ベリかん社 四月

山中源二郎「縦横人類学を読む」へのコメント

季刊人類学 二卷二号 四月

Kyoto University African Studies (ed.) Vol. VI.

人文研 四月

人口・経済・エコロジ(座談会) 中央公論 五月

海外旅行入門 週刊・朝日ゼミナール 四五号 五月

出口王仁三郎における変革の思想(対談・上田正昭)

「立替え立直し」 大本木部 五月

・梅原郁

宋代の内蔵と左蔵——君主独裁制の財庫—— 東方学報 四二号 三月

・太田武男

◎婚姻の届出(共著)

有斐閣 四月

・小野和子

儒教イデオロギーにおける「正統と異端」

(岩波講座 世界歴史 一二卷) 二月

・樺山紘一

中世後期における国家の観念 人文学報 三一号 三月

・川勝義雄

重田氏の六朝封建論批判について

歴史評論 二月号

・河野健二

「無用の用」としての言論 世界 一月号

一八四八年と社会主義 (岩波講座 世界歴史 一九卷) 三月

書評・ベルナルト・ヴィルムス著 信太正三訳『革命と拒絶』

エコノミスト 四月二〇日

・衣川強

官僚と俸給——宋代の俸給について—— 東方学報 四二冊 三月

・熊倉功夫

近代茶の湯人脉史(二六〜二七)

日本美術工芸 三九一・三九二号 四・五月

・阪上孝

書評・マルクスの思想的原像

日本読書新聞 二月

・島田 虔 次

清末小説についての感想

野草 二号 一月

・竹内 成 明

野間宏論

思想の科学 一月号

近代的思维の断層

展望 五月号

梅本克己論

季刊・日本の将来 春季号 五月

・多田 道 太郎

◎大衆文学の可能性(共著)

河出書房 一月

ホイジンガからカイヨワへ

人文学報 三二号 三月

◎複製時代の思想(共著)

グラフィケイション 別冊 四月

◎遊びと人間(翻訳)

講談社 四月

管理社会の影

展望 四月号

◎共同討議・性

筑摩書房 五月

『大菩薩峠』の女たち(中里介山全集 九卷)

五月

・礪 波 護

官僚社会(中国文明選 一一卷 月報)

朝日新聞社 二月

唐代史料稿 大和元年・二年(共編)

東方学報 四二冊 三月

・狭 間 直 樹

日本帝国主義と中国

京都大学新聞 二月八日

・橋 本 敬 造

権田法の展開——「歴史考成後編」の内容について——

東方学報 四二号 三月

・林 巳 奈 夫

長沙出土楚帛書の十二神の由来

東方学報 四二冊 三月

・林 屋 辰 三 郎

日本文化の東と西

世界 一月

自治—その源流

信濃毎日新聞 一月

東寺と武將(東寺発行『東寺と武將』)

三月

神話と伝説

文芸春秋 五月

青葉若葉の日の光

茶道雑誌 五月

・樋 口 謹 一

日本人のアメリカ化

月刊・エコノミスト 一月号

解説・鶴見俊輔「日本知識人のアメリカ像」

季刊・日本の将来 春季号 五月

ルソー政治思想の一「祖型」について

思想 五月号

『大菩薩峠』の男たち(中里介山全集 一〇卷)

五月

平 岡 武 夫

唐代史料稿 大和元年・二年(共編)

東方学報 四二冊 三月

◎白氏文集 卷三・四・六・九・十二・十七(共編) 人文研 三月

・藤岡 喜愛

書評・アーサー・ケストラー『機械の中の幽霊』

季刊人類学 二卷一号 一月

季刊人類学 二卷二号 四月

・船越 昭生

朝鮮におけるマテオリッチ世界図 人文地理 一三卷一号 四月

・前川 和也

シユメールとミケーネ 人文学報 三三二号 三月

・牧田 諦亮

◎五代宗敎史研究 平楽寺書店 三月

敦煌本提謂経の研究(下) — 安世高訳分別善惡所起経との類似 —

仏敎大学大学院研究紀要 二号 三月

中華人民共和国建国当初における僧侶再教育

日本仏敎学会年報 三六号 三月

・三宅 一郎

世論調査型データ解析のプログラム・パッケージ

京都大学大型計算機センター広報 四卷一号 一月

制限と故障の多い共用ファイル

京都大学大型計算機センター広報 四卷二号 二月

汎用統計プログラム(BMD)書き換え作業の現状(1)

京都大学大型計算機センター広報 四卷三号 三月

世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム(1)

SDAPとTAP — 人文学報 三二号 三月

世論調査型データ解析のコンピュータ・プログラム(2)

SDAPへの追加と改訂 — 人文学報 三三二号 三月

政党支持の流動性と安定性 — 政党支持の幅の仮説の予備的検討 —

(日本政治学会編 現代日本における政治的態度の形

成と構造 — 政治学年報一九七〇 —) 岩波書店 五月

書評・永井陽之助著『政治意識の研究』

エコノミスト 五月二五日

・山下 正男

論理学とはなにか(完) 哲学研究 五一八号 二月

・山田 慶児

朱子の気象学 東方学報 四二册 三月

・山本 有造

投資スパイトと資本輸入 — 日露戦争・第一次大戦間を中心に —

社会経済史学 三六卷五号 一月

鍊金と鍊丹 東洋學術研究 九卷二号 一月

伝統と進歩 きょうと 六二号 一月

佐藤首相への直言 月刊ペン 一月

複製技術のあゆみ(複製時代の思想、所収) 自由 三月

文明と終末 自由 三月

挫折のピアニスト 人文學報 三〇号 三月

季節のことば 婦人百科 七〇年四月〜七一年三月

現代を理解するために 大望 二〜四月

●京の手仕事 駁々堂 四月

日本の工芸 茶道雜誌 五月

機械文明の発達と人類史 総合教育技術 五月

微笑への意見 潮 五月

文明の終末観と人間の再生 日本及日本人 五月

・渡部 徹

●堺市史 統編 二卷(編) 堺市役所 二月

部落解放を目ざす同和行政のあり方 近代ジャーナル 五〜六月号

大衆運動と部落解放運動 月刊社会党 五月号

将 来 計 画

「中国文化圏における伝統文化継承と変容」現地調査計画について

田中謙二

東方部は香港・ビルマ両班を組織する。当部としてはあくまで大陸本土をめざすものであるが、現状下やむをえず、一まず香港地域をえらび、同時に中華人民共和國の研究機関とより密接な連絡をはかる。また、文化圏中でビルマをえらだのは、従来この地域には調査研究の手があまり伸びていなかったからである。なお、初年度は予備調査に当て、第二・三年度における本格的調査にそなえるつもりである。

(一) 香港班 言語・文学部門(田中教授・算助手)

では、中国人の世代間における言語現象の相違、中国語における諸方言ないしヨーロッパ語の影響、および本土の現代文学とくに小説・戯曲(むしろ演劇)の受容状況を調査する。思想・社会部門(山田・梅原両助教授)では、中国社会における祖国意識・民族意識、および本土との親戚縁故関係などを調査する。

(二) ビルマ班 地理・民族(日比野教授) 宗教(牧田助教授) 両部門が当たり、華僑社会における民俗・宗教の現状調査を行なう。

## 編集後記

『人文』三号を、ようやく、お手もとにおとどけけることができて、ホッとしている。原稿締切りが五月末だったから、二カ月かかったわけである。まことに申し訳けない。

遅延の理由は、まず第一に、原稿の集りが悪かったことである。そのため、原稿を印刷に廻すのが六月末になり、さらに、初校の余白を埋めるため、改めて原稿をお願いしたりしたので、一層遅れることになったのである。

しかし、できればは、皆様のおかげで、二号よりも、一層よくなったとおもう。本誌が、官報でも學術雑誌でもなく、所員の相互啓蒙・相互批判の場であるという発刊の主旨が、一層徹底してきたからである。

二号にたいするご批判を生かして、三号では、とくに「共同研究のうごき」に工夫をこらしてみた。また、個人研究のうごきを知らせあうために、新たに「研究ノート」という欄を設けた。さいわい、山本・樺山両氏の好編をえることができたが、今回は東方部の方々の文章をえることができなかったのは、残念であった。皆様のおちからで、この欄をも、一層充実させていきたい。

◇ 「三号雑誌」という言葉がある。雑誌は、たしいがい、三号でつぶれるという意味である。つぶれないまでも、一種のケンタイ期に入るといふことであろう。一、二号にくらべて、三号は原稿の集りが悪かったということに、私は危機

感をかんじている。皆様の一層のおちからぞえとご批判とをお願いする。

◇ 十五年ぶりの編集の仕事だった。

私は雑誌の編集にはいささかの「自信」もあり、そのうえでおびきうけたのだったが、これがまったくの見当はずれだった。もちろん、私の自己認識の甘さのせいである。

十五年前、『思想の科学』の編集を手伝った。これは自分では満足のゆく仕事だった。なるほど、編集の才というものはあるのだな、とその時、思ったのである。

これがまちがいであった。正確にいえば、まちがいのもどった。

編集の資格は、まず原稿選択の能力と、次に仕事の丹念にある。「まず」「次に」といったが、これはデタラメ。どちらがより重要であるか、それは、場合によるのである。

私は編集とは「まず」選択能力だと思っていた。これがまちがいなのである。

この雑誌『人文』には、選択能力は必要ではない。可能なかぎり多様な原稿を集めること、それが肝心の眼目なのである。問題は蒐集であつて選択ではない。

ところが、おどろいたことに私は蒐集能力がまるでない。筆者と編集者がついついナレあつて、きびしい顔での督促が不可能であった。さらに、レイアウトなどの入念な仕事が、私には絶望事と思われた。

以上、私のお詫びかたがたの編集者不適格宣言であるが、考えてみれば、四十歳以上のジャーナリストは職業的不適格者であるという「法則」は、こういうミニコミにも通じるのかもし

れない。

◇

日本の世界卓球大会が、おもいがけなくニクソン大統領の中国訪問をよび越すといったように、世界の情勢は、いま、急速に流れをかえつつある。そのようななかであつて、日本は、精神的な「鎖国」状態におちいつているのではないかと、パリ在住二十年の森有正氏が、最近、書いておられた。

日本の研究体制などにも、敗戦後二十六年、いろいろの問題が山積している。ここいらで、根本的に考え直してみる必要があるのではないかと。たとえば、教養部と学部との関係、大学院の問題など、十年一日のごとく、いっこうにラチがあかない。たとえ、このような教育・研究体制にあつて、なお、すぐれた成果をあげられているとしても、そのことが決して、この体制の不備を合理化することにはならない。

二年まえ、いわゆる全共闘運動が、われわれにつきつけた問題も、このような大学体制にたいする根本的な反省を求めるところにあつたのだとおもう。しかし、最近、わが研究所でも、このような研究体制にたいする反省が、すっかりなりを生かしてしまつたようだ。そのような反省から生れたひとつの成果としての研究者会議も、最近では、いっこうにサエない。

本誌もまた、このような反省から生れたのであつた。「初心、忘るべからず」本誌が、本来の役割を果していくことができるよう、皆様のおちからぞえを、切にお願ひする。

編集委員(日) 飯沼 二郎

(東) 藤枝 晃

(西) 多田道太郎